

## 共通認識の醸成を目指して



### 加 地 範 匡

2024年度九州支部長を仰せつかりました，九州大学大学院工学研究院応用化学部門（機能）の加地範匡と申します．昨年度の8月号ではAnalytical Sciences誌の編集委員長として執筆の機会をいただきましたので，今回は支部長の立場で最近考えていることをお話しさせていただきます．（サイエンスとは関係が薄く，申し訳ありません．）

2018年に九州大学へ異動して九州支部活動に参画し始めてから早6年が経ちました．この間，コロナ禍があったため思うような活動ができない時期もありましたが，九州支部若手の会が主催する夏季セミナー（於：鹿児島）は，今年度もコロナ禍前と変わらぬ若手の熱量の高さを改めて感じる事ができる集いとなりました．ただ，私も学生の年齢の倍を超える齢に達したせいでしょうか，大きな世代間ギャップを感じるようになってきました．特に日々の学生とのディスカッション時に使用する言葉・表現の意味合いが発する側と受け取る側で異なり，意思疎通が取りづらくなってきていると感じます．この状況は，科学者の中でも最も客観的に事象を捉えて正確に表現することが求められる分析化学者の読者の方々には容易に共感していただけるかと思います．しかしながら，最も危惧しているのは国が主導している施策の受け手である若い世代の受け取り方が，我々の想像の斜め上を行っている点です．例えば「貯蓄から投資へ」は，今の学生には「働かずに収入を得る方法を考えよう」と映るそうで，彼らには投資される企業で一生懸命働いている人の姿はもちろんのこと，そこで自分達が働く（投資を受ける側の）姿は脳裏にもなく，あるのはスマホの投資サイト画面だけです．本スローガンの高揚とともに，「科学技術立国日本」，「日本人は勤勉」などというフレーズそのものを知らない若い世代が増えてきたのは，私のアンコンシャス・バイアスでしょうか．

実は私が支部長に就任して痛感していることも，この延長線上にあるように思えてなりません．日本分析化学会の会員総数は，平成元年には9千人を超えていましたが，現状は5千人を切る状況であり，九州支部においても分析化学関連の大学教員数は減少の一途をたどっています．このような状況においても世界と伍するには，若手への「投資」や「投資」効率を最大化するための仕組み作り，会員数相当の体制作りといった改善はもちろんですが，今まで以上に各会員が学会を支える一員であるという当事者意識を一段高くもち，自分達が行動しなければ明日の分析化学会はないくらいの危機感を共有して，現場で額に汗する必要があるのではないでしょうか．限られた時間と数少ない言葉で九州支部会員と意思疎通を行い共通認識を醸成することの難しさに苦慮しておりますが，諦めるわけにはいきません．今後も九州支部内はもちろんのこと，他支部の会員の皆様方とのさらなる交流の深化を強くお願い申し上げます．

〔Kaji Noritada, 九州大学大学院工学研究院, 日本分析化学会九州支部長〕